「小学校教科内容論体育」受講者の体育授業および陸上運動の授業に対する意識の変容に関する研究

小山宏之*
(*京都教育大学)

A study on Changes in Students' Attitudes for Classes of Physical Education and Athletics in Classes for Teaching Methods of Elementary School Physical Education

Hiroyuki KOYAMA

2023 年 8 月 31 日受理

抄録：本研究の目的は，小学校教員免許状取得のために必修である「小学校教科内容論体育」の受講生の体育および陸上運動の授業に対する好意性と，受講前後の好意性の変化を明らかにすることであった．当該授業受講生 1 回生に対して体育および陸上運動の授業の好意性に関するアンケートを授業前後で行った（回答数 : pre，233 名 ; post，161 名）．主な結果として，①小学校体育授業を「好き」と答えた学生は全体の 62.3%で，「嫌い」と答えた学生は 21.4%であった．②陸上運動の 5 種目の授業について「好き」と答えた学生の割合は 27.0%から 52.4%の範囲，「嫌い」と答えた学生は 32.2%から 44.2%の範囲であり，ハードル走および走り高跳びの授業の好意性が低かった．③授業後の陸上運動の 5 種目の授業に関する学生の好意性は，全ての種目で「好き」という割合が増加し，「嫌い」という割合が減少した．以上の結果から，本学学生の入学時点の状況として，体育および陸上運動の授業の好意性が低い学生が多い傾向にあるが，小学校教科内容論体育の授業を通じて，それらの学生の好意性を変化させることができる可能性があることが示唆された．

キーワード：教員養成課程，小学校体育，陸上運動，受講生の好意性，授業による好意性の変化

Ⅰ．はじめに

本研究の対象とする本学授業「小学校教科内容論体育（以下，小内論体育）」は，小学校免許を取得するために体育領域専攻を除いた全ての専攻で履修が必修となっている授業である（京都教育大学，2023）．そのため，毎年履修者が非常に多く，2023 年度は体育領域専攻を除いた 1 回生 292 名の内 259 名（88.7%）が履修している科目である．

体育は，幼少期からの運動経験，体力や運動能力，運動習慣などの影響により，運動の「できる」・「できない」がはっきりとでやすく，得意・苦手，好き・嫌いの好意性といった意識が芽生えやすい教科であり，体育の授業の好き嫌いの感情は小学校期に形成されて大学生期まで大きく影響していること（福富ら，2011）が報告されている．そして，小学校教員を目指す学生の中には，教育実習で体育の授業を担当することになった場合に指導に対する不安が生じやすいことや，実際に小学校教員となる学生においても，体育の指導に不安を有している場合が多いことが報告されている（木原ら，2003 ; 松田，2016）．

小学校教員として体育授業を担当する上で，その教科指導に必要不可欠な資質・能力の 1 つとして，学習内容である運動に対して肯定的な態度や意識を持っていることが重要であると指摘されている（三浦ら，2001）．小山ら（2023）は 2022 年度の小内論体育受講生の体育に対する意識を調査し，約 69%の受講生が体育に対して好きという好意的な意識を持っている一方で，約 15%程度の学生が嫌いという否定的な意識を持っていることを報告している．また，この本学の体育に対する好意性は他大学の教員養成課程の学生（川田，2018 ; 廣兼と平井，

2007 ; 福地と中雄，2018）と比較して「嫌い」という意識を持つ学生の割合がやや多いことを示している．そして，この結果を受けて，この傾向が単年度のものなのかを継続的に調査するとともに，三浦ら（2001）が指摘するように，小学校体育授業の担当者として運動に対する肯定的な態度や意識が必須ならば，本学の学生の状況を適切に捉え，大学授業においてその意識をより肯定的に変容させていく必要があることを指摘している（小山ら，2023）．

小学校の体育実技の内容は 6 領域で構成され（文部科学省，2018），本研究が対象とする小内論体育は 6 領域の中の器械運動と陸上運動を取り扱う授業である．本研究でテーマとする陸上運動は「短距離走・リレー」，「ハードル走」，「走り幅跳び」，「走り高跳び」で構成されている（文部科学省，2018）．このうち，短距離走を例にあげると，小学校から中学校，高等学校と学校段階があがると「できる」自信が低下し，好感度が下がりやすいこと（大塚，2013），タイムや順位によって結果が可視化されるため，能力差が自覚されやすく，屈辱感を味わいやすいこと（中西，2000）など，運動嫌いにつながる要因が複数報告されている．また，その他の種目においてもタイムや距離などの結果が明確にでるという特性は同様のため，運動嫌いや体育嫌いにつながりやすい運動領域であると考えられる．そこで，大部分が学校教員を志望する本学学生の運動に対する肯定的な態度や意識を効果的に形成していくためには，学生の運動に対する受講生の好意性を把握した上で，小内論体育の授業を展開していくことが重要であると考えられる．

そこで本研究では，小学校教員免許状取得のために必修である「小学校教科内容論体育」の受講生を対象に，本学学生の体育および陸上運動の授業に対する好意性と，受講前後の好意性の変化を明らかにすることを目的とした．

Ⅱ．研究方法

1．調査対象者

本研究では，小学校教員免許状取得のために必修科目である「小学校教科内容論体育」を受講する 1 回生 259 名に対して，後述する内容のアンケート調査を授業前（以下，pre 調査）および授業後（以下，post 調査）の計 2 回行った．調査に際しては，調査内容，目的，データの取り扱い，及び本調査が授業成績には影響しないことを説明した上で協力を依頼した．得られたデータのうち，回答に不備のあったものを除き，pre 調査では 233 名（男子：87 名，女子：146 名）を分析対象とし，post 調査では得られた回答（184 名）のうち，pre 調査の回答も得られている 161 名（男子：56 名，女子：105 名）を分析対象とした．なお，分析対象者の内訳は表 1 に示した通りで，回答率は 90.3%（第 1 回）および 62.1%（第 2 回）であった．

表1　調査対象者の領域の内訳

クラス	(a)		(b)			(c)		(d)	(e)		(f)		合計
領域	教育	国語	幼児教育	発障	英語	家庭	音楽	理科	社会	技術	数学	美術	
人数（人）													
pre	27	17	20	12	20	18	9	37	27	7	27	12	233
post	22	13	16	9	13	12	6	22	19	4	18	7	161

表 2 は小内論体育における陸上運動の主な授業内容を示している．陸上運動の授業回数は 7 回であり，第 1 回目は小学校体育および陸上運動の考え方に関する講義，第 2 回目以降は短距離走，ハードル走，リレー，走り幅跳びまたは走り高跳び（跳躍種目はどちらかを選択）に関する実技を行った．実技では，学生の体育授業における ICT 利活用力の向上もねらいの 1 つとして，1：モニターを活用した授業内

表2 小学校教科内容論体育における陸上運動の主な授業内容

授業回	授業形態	主な授業内容
(1)	講	小学校体育授業／陸上運動の考え方
(2)	実	短距離走について
(3)	実	ハードル走について（1）
(4)	実	ハードル走について（2）
(5)	実	リレーについて（1）
(6)	実	リレーについて（2）
(7)	実	走り幅跳び／走り高跳び

容の提示，2：映像による実際の競技や子どもの運動の提示，3：動画や写真による各種目のポイントの解説，4：失敗事例の提示，5：タブレットやスマートフォンを利用した学生同士での動作撮影と評価，6：授業内容に関するオンデマンド動画の配信，7：Google Forms を活用した授業の振り返りなど， ICT 機器の積極的な利活用を行った．さらに，実技の運動場面は，各種目の基礎的な運動内容から発展的な運動内容へとステップアップしていく内容で展開した．

2. アンケート調査の内容および調査方法

アンケートは Google Forms（Google 社）で作成し，pre 調査は小内論体育における陸上運動の第 1 回目の授業において各自の携帯端末でアクセスさせた後に回答させ，post 調査は陸上運動に関する計 7 回の授業終了後に回答ページの URL を配布して回答させた．表 3 は pre および post 調査のアンケート項目を示している．設問項目として，(A) 運動・スポーツの好意性に関する項目，(B) 小学校から高等学校までおよび大学の体育授業に対する好意性に関する項目，(C) 陸上運動の各種目に対する好意性に関する項目，(D) 小学校の体育授業において，陸上運動の授業を行う（教える）ことに対する自信に関する項目を設定し，表 3 に示したように 5 件法で回答させた．なお，(A)，(C) および (D) 項目は pre および post 調査の共通項目とし，(B) 項目は pre では小学校から高等学校までの体育について，post では大学体育（本授業）に対する好意性を質問項目とした．さらに，各対象者の特性として，(i) 領域，(ii) 卒業後の進路校種，(iii) 運動経験について pre 調査で回答させ，運動経験に関する質問形式は表 3 に示した通りである．

表3　アンケート調査の設問と選択肢

(A)「運動・スポーツは好きですか？」 （一）からだを動かすこと，（ニ）運動・スポーツをすること ①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き
(B-pre)「体育の授業は好きですか？」 （一）小学校時代の体育，（ニ）中学校時代の体育 （三）高等学校時代の体育，（四）体育授業を総合的に考えて ①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き
(B-post)「大学体育（小学校教科内容論体育）の授業は好きですか？」 ①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き
(C)「陸上運動の授業内容は好きですか？」 （一）短距離走，（ニ）ハードル走，　（三）リレー，（四）走り幅跳び，（五）走り高跳び ①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き
(D)「小学校体育の授業で，陸上運動の授業を行う（教える）自信はありますか？」 （一）短距離走，（ニ）ハードル走，　（三）リレー，（四）走り幅跳び，（五）走り高跳び ①自信がない　②やや自信がない　③どちらとも言えない　④やや自信がある　⑤自信がある
(iii)「体操，陸上，それ以外のスポーツを，「スポーツ教室」や「部活動」で行っていましたか？」 （一）小学校入学前，（ニ）小学校，　（三）中学校，（四）高等学校，（五）大学 ①体操　②陸上　③それ以外のスポーツ　④経験なし　※複数回答可

※A，C，Dの項目はpreおよびpost調査で共通の項目

3. 統計処理

アンケート調査の結果について，5 件法で選択させた項目については，①を 1 点，②を 2 点，③を 3 点，④を 4 点，⑤を 5 点として集計した．pre 調査における各質問項目の性差および運動経験による差の検討は Mann-Whitney の U 検定を，授業前後の好意性の差の検討は符号付順位和検定を行った．統計分析には SPSS22.0 を利用し，統計的有意水準は 5%以下とした．

Ⅲ．結果および考察

1．調査対象者の特性

（1）志望校種

調査対象者の志望校種について，小学校，中学校，高等学校，幼稚園，特別支援学校，その他の 6 種類で調査した結果（括弧内は post 調査の結果），小学校志望が 41.6%（41.6%），中学校志望が 23.6%（23.0%），高等学校志望が 17.6%（17.4%），幼稚園志望が 7.7%（9.3%），特別支援学校志望が 2.1%（3.1%），その他が 7.7%（5.6%）であった．この結果から，対象者の 40%程度が小学校教員となることを想定して受講していたと言える．なお，小学校教員志望の学生や実際の小学校教員に体育指導の不安が多いこと（木原ら，2003；松田，2016）を踏まえると，志望校種別の分析も重要であると考えられるが，本調査は授業の標準履修学年である 1 回生を対象とした入学直後の調査となることから，将来を十分に見すえた志望でない可能性もあるため，小山ら（2023）と同様に，調査結果の志望校種別の比較は行わないこととした．

（2）運動経験

図 1 は調査対象者の運動経験について調査対象者全体および男女別にその割合を示したものである．なお，本調査では運動の種類について，「陸上」および「陸上以外の運動」と区別して回答させたが，「陸上」および「陸上以外の運動」はあわせて運動経験ありとして集計した．全体の結果では，運動経験を有する割合は，小学校入学前で 40.8%，小学校で 75.1%，中学校で 73.0%，高校で 57.9%であった．

男女による比較では，小学校，中学校および高校において男子が女子に比べて運動経験がある割合が有意に大きかったが（$p<0.05$），小学校入学前では有意な差は見られなかった．小山ら（2023）は，2022 年度の小内論体育受講生について小学校から中学生にかけて約 70%近い学生に運動経験があったことを報告しているが，2023 年度の受講生においても運動経験を有していた学生の割合は同程度であった．なお，男子学生では運動経験を有している割合が極めて大きく，90%以上の学生が小学校および中学校時代において運動を行っていた．

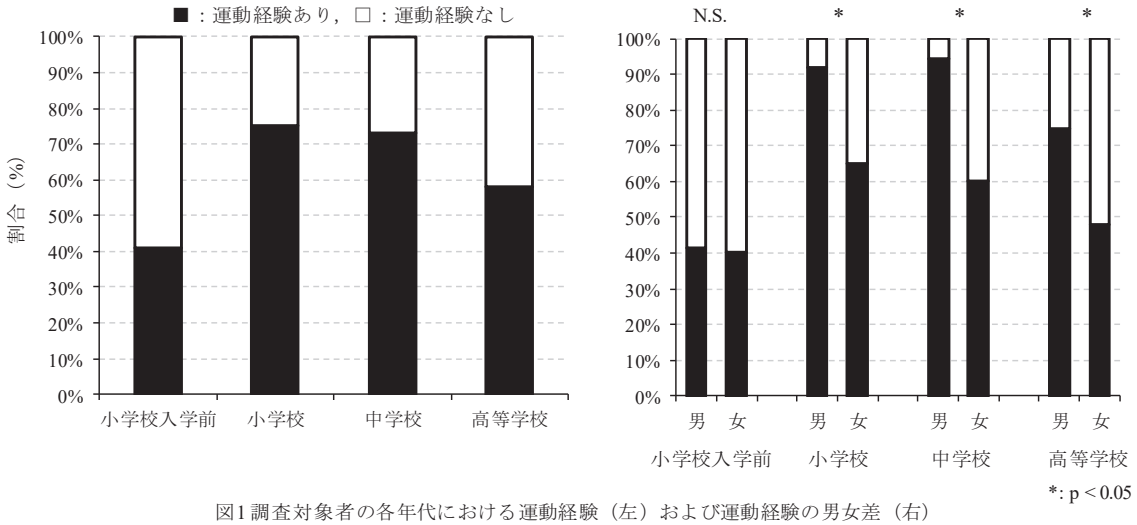

図1 調査対象者の各年代における運動経験（左）および運動経験の男女差（右）

2．体育授業に対する好意性について

図 2 は小学校体育および，小学校から高等学校までの体育授業全体（以下，体育全体）の観点から，体育授業の好意性について調査対象者全体，男女別，運動経験別にまとめたものである．調査対象者全体では小学校体育については 62.3%，体育全体においては 66.1%の学生が「やや好き」または「好き」と回答し，「やや嫌い」または「嫌い」と回答した学生は，小学校については 21.4%，体育全体については 15.8%であった．

男女による好意性の比較では，男子では小学校体育および体育全体のいずれにおいても 75%以上の学生が「や

や好き」または「好き」と回答し，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生は，それぞれ 13.8%と 9.0%であった．一方で，女子では「やや好き」または「好き」と回答した学生はいずれも 60%未満であり，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生の割合は，それぞれ 26.0%と 20.5%であった．このように，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した女子の割合は男子の 2 倍程度あり，体育全体の好意性について，女子は男子に比べて有意に低かった（$p<0.05$）．

運動経験による好意性の比較では，経験有りでは小学校体育および体育全体のいずれにおいても 70%以上の学生が「やや好き」または「好き」と回答し，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生はそれぞれ，21.6%と 12.7%であった．一方で，経験無しでは「やや好き」または「好き」と回答した学生は小学校体育については，34.4%，体育全体では 24.1%であり，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生の割合はそれぞれ，31.0%と 37.9%であり，体育授業の好意性について運動経験の有無で有意な差が見られた（$p<0.05$）．

これらの結果から，2023 年度の受講生の 60%以上は体育授業に対して「好き」という意識を持つ一方で，体育授業に対して「嫌い」という否定的な意識を持つ学生も約 20%の割合でいることが示された．小山ら（2023）は，2022 年度の小内論体育受講生の体育に対する好意性の傾向から，当該授業受講生の体育に対する好意性として，体育が「好き」と答えた学生の割合は他大学（表 3，三浦ら，2001；廣兼と平井，2007 川田，2018；福地と中雄，2018）と同程度であったが，「嫌い」と答えた学生の割合がやや高い傾向にあることを報告している．本研究の結果から，2023 年度受講生の傾向も 2022 年度と同様であったが，「好き」・「やや好き」と回答した学生の割合が 2022 年度よりも少なく，「やや嫌い」・「嫌い」と回答した学生の割合が多いことが明らかとなった．

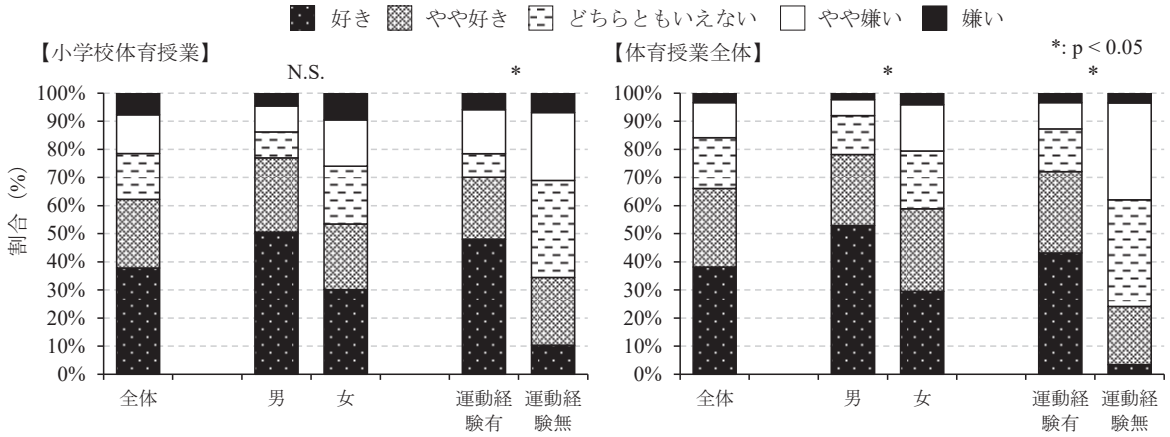

図2　調査対象者の小学校体育授業（左）および体育授業全体（右）に対する好意性と性別および運動経験の有無による体育授業に対する好意性の相違

表4　先行研究における体育授業の好意性の割合

文献	調査対象	体育に対する好意性		備考
		好き（%）	嫌い（%）	
三浦ら（2001）	国・教職・受講生，2回生	70.0	15.7	小学校体育，3件法
廣兼と平井（2007）	国・教職・受講生，2・3回生	66.9	10.8	小学校体育，5件法
川田（2018）	私・教職・受講生	81.3	13.3	小学校体育，5件法
福地と中雄（2018）	国・教職・受講生	60.9	13.0	体育（全体），3件法
小山ら（2023）	国・教職・受講生，1回生	69.4	19.4	小学校体育，5件法

※小山ら（2023）を引用加筆
※：国，国立大学；私，私立大学；教職，教職科目

3．陸上運動の授業に対する好意性について

図 3 は小学校の陸上運動で行う種目である「短距離走」，「ハードル走」，「リレー」，「走り幅跳び」および「走り高跳び」の授業に対する好意性について，調査対象者全体，男女別，運動経験別にまとめたものである．調査

対象者全体では，「やや好き」または「好き」と回答した学生の割合は短距離走で 48.1%，ハードル走で 31.3%，リレーで 52.4%，走り幅跳びで 36.1%，走り高跳びで 27.0%であった．一方で，「やや嫌い」または「嫌い」と回答した学生の割合は短距離走で 35.6%，ハードル走で 44.2%，リレーで 32.2%，走り幅跳びで 38.2%，走り高跳びで 42.9%であった．

男女別では，リレーでは男女で好意性の割合に差はなかったが，その他の種目では男女で有意差が見られ，女子の方が好意性は低くなり，「やや嫌い」または「嫌い」と答えた学生の割合が女子の方が多かった（$p<0.05$）．

運動経験別では，全ての種目において運動経験の有無で好意性に有意差が見られ（$p<0.05$），「やや好き」または「好き」と答えた割合が経験有りに比べて経験無しの方が低かった（$p<0.05$）．また，運動経験なしの学生では，ハードル走および走り高跳びにおいて「やや嫌い」または「嫌い」と答えた割合がともに 68.9%であった．

これらの結果から，陸上運動の各種目の授業に対する好意性は体育全体の好意性（図 2）よりも低くなり，リレーを除いて好意的な意識を有していた学生が 50%を下回っていた．さらに，ハードル走や走り高跳びでは「嫌い」という意識を持つ学生の割合が「好き」と考えている学生を上回り，男女別に見た場合には，上述の 2 種目について 50%以上の女子学生で「嫌い」という意識を持っていた．つまり，学生にとって陸上運動は敬遠されがちな運動であり，特にハードル走や走り高跳びで顕著であると考えられる．

その背景として，陸上運動の特性が影響している可能性が考えられる．陸上運動はその特性上，タイムや距離などの数値で結果がでるため，その記録の大小によって運動のできる・できないが評価されやすく，能力差が自覚されやすい．そのため，結果として自信の低下や屈辱感を味わいやすい種目である（中西，2000）ことも指摘されている．さらに，ハードル走では越えていくことに対する恐怖心が芽生えやすい種目（阿久津ら，2012）であり，バーを越える運動である走り高跳びも同様であると考えられる．當山ら（2022）は運動の成功体験から生まれるやればできるという自分に対する自信を表す運動有能感が高いほど，体育授業や運動の回避的行動が少なくなることを示し，逆に，運動有能感が低い場合には回避する傾向になることを指摘している．本研究の調査資料ではないが，各授業後に学生が記述するレポート資料では，「走るのが遅いので短距離走は好きでない」，「タイムが遅いので人前で走るのが嫌である」，「ハードルを越えれないのでハードル走は好きではない」という主旨の記述が多く見られる．つまり，学生がこれまで関わってきた小学校から高校までの体育授業や，運動会などの体育的な活動における経験の中で，自身の失敗経験，技能水準や記録に対して劣等感を感じることが好意性と関連している要因の 1 つであることが推測される．

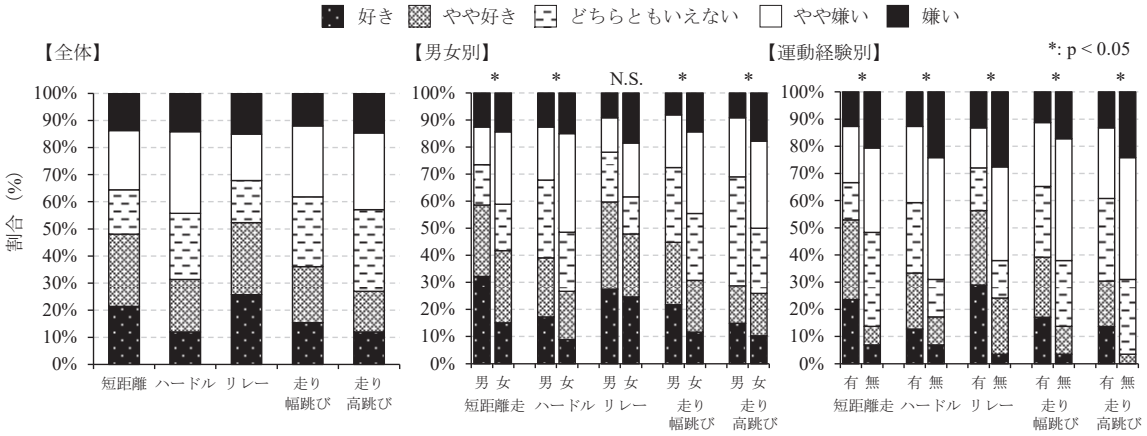

図3　調査対象者の陸上運動の各種目の授業に対する好意性（左）と性別（中）および運動経験の有無（右）による好意性の相違

4. 授業前後における陸上運動の授業に対する好意性の変化について

図 4 および表 5 は授業前後における陸上運動の各種目の授業に対する好意性の変化について，調査対象者全体および男女別にまとめたものである．なお，表 1 に示したように，図 4 の授業前のデータは pre 調査対象の 233 名から post 調査でも回答が得られた 161 名分を抜粋したものであるため，抜粋後データの授業前の回答分布（図 4）と全体の授業前の分布（図 3）の差を χ^2 乗検定で比較した．その結果，全ての種目の回答分布に差がなかっ

たことから，抜粋後の対象者の好意性は受講者全体の傾向を反映していると捉え，授業前後の比較を進めていく．

調査者全体の授業後の好意性について，「やや好き」または「好き」と回答した学生の割合は短距離走で 65.8%（授業前，45.4%），ハードル走で 58.4%（26.0%），リレーで 57.7%（50.3%），走り幅跳びで 48.5%（34.2%），走り高跳びで 45.4%（25.5%）であり，「やや嫌い」または「嫌い」と回答した学生の割合は短距離走で 23.0%（36.0%），ハードル走で 20.5%（46.6%），リレーで 19.3%（32.9%），走り幅跳びで 21.1%（39.7%），走り高跳びで 25.5%（46.5%）であり，全ての種目で授業前後の好意性に有意な差が見られ（$p<0.05$），否定的な意識を持つ学生の割合は減少し，肯定的な意識を持つ学生の割合が増加した．また，男女別に見た場合も全ての種目で授業前後の好意性に有意な差があり（$p<0.05$），「やや好き」または「好き」と回答した学生の割合が増加した．特に，女子学生の好意性の変化が大きく，最も変化が大きかったハードル走については，「やや好き」または「好き」と回答した学生の割合が 32.4%増加して 54.3%になり，「やや嫌い」または「嫌い」と回答した学生の割合は 31.4%減少して 22.9%となった．

これらの結果から，陸上運動の 7 回の授業を受けて各種目の授業に対する好意性が大きく変化し，否定的な意識を持つ学生が減少し，肯定的な意識を持つ学生が増加したことが明らかとなった．また，「どちらともいえない」という中間の回答をした割合も減少する傾向にあることも示された．そこで，学生の実際の意識の変化の仕方を意識の変化の大きかったハードル走を例にして詳細に比較した（図 5）．結果として，授業前後において肯定的な方向に 4 段階変化した学生（嫌い→好き）や，3 段階変化した学生（嫌い→やや好

表5 授業前後における調査対象者全体および男女別の陸上運動の各種目の授業い対する好意性の平均値と分散

			平均値※	分散※	統計結果
短距離走	全体 n=161	pre	3.1	1.8	pre < post
		post	3.7	1.6	
	男子 n=56	pre	3.4	2.0	pre < post
		post	3.9	1.5	
	女子 n=105	pre	3.0	1.7	pre < post
		post	3.5	1.6	
ハードル	全体 n=161	pre	2.7	1.4	pre < post
		post	3.5	1.3	
	男子 n=56	pre	3.0	1.7	pre < post
		post	3.7	1.5	
	女子 n=105	pre	2.6	1.2	pre < post
		post	3.4	1.2	
リレー	全体 n=161	pre	3.3	1.9	pre < post
		post	3.8	1.5	
	男子 n=56	pre	3.4	1.6	pre < post
		post	3.9	1.4	
	女子 n=105	pre	3.2	2.1	pre < post
		post	3.7	1.5	
走り幅跳び	全体 n=161	pre	3.0	1.6	pre < post
		post	3.4	1.3	
	男子 n=56	pre	3.3	1.6	pre < post
		post	3.7	1.2	
	女子 n=105	pre	2.8	1.5	pre < post
		post	3.3	1.3	
走り高跳び	全体 n=161	pre	2.7	1.5	pre < post
		post	3.3	1.4	
	男子 n=56	pre	3.0	1.4	pre < post
		post	3.7	1.3	
	女子 n=105	pre	2.6	1.5	pre < post
		post	3.1	1.3	

*<, $p<0.05$
※得点は嫌い1点，やや嫌い2点，どちらともいえない3点，やや好き4点，好き5点で集計した結果の平均値と分散を示したものである．

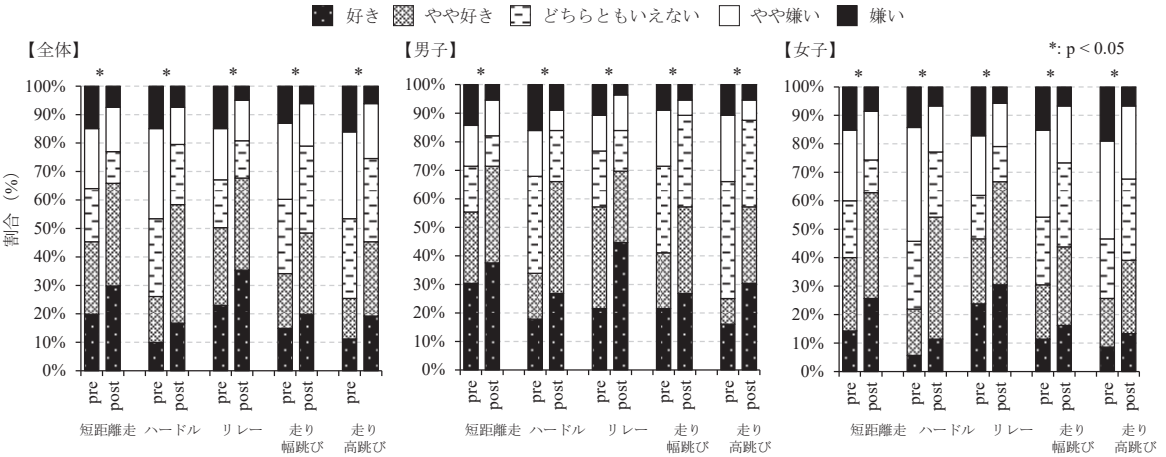

図4　授業前後における調査対象者の全体（左）および男女別（中よび右）の陸上運動の各種目の授業に対する好意性の変化
（※pre調査のデータはpost調査に回答を得られた学生161名分のみ抜粋している）

き;やや嫌い→好き)をはじめ,大きく好意性を変化させた学生が多くいたことが明らかとなった.三浦ら(2001)は，小学校教員として体育授業を担当する上で，教科指導に必要不可欠な資質・能力の 1 つとして，学習内容である運動に対して肯定的な態度や意識を持っていることが重要であること，小山ら（2023）は小学校体育に関係する授業の中で，本学学生の体育に対する意識を肯定的に変容させていく必要があること述べている．つまり，本研究の結果から，本学に小学校教員志望で入学してくる学生の体育に対する好意性は低い場合も多いが，小学校体育の授業を通じて大きく肯定的に変容できることが明らかとなった.

本研究では,好意性の変化の要因を明らかにする調査を行っていないが,本授業の特徴として,①積極的な ICT 機器の利活用（1：モニターを活用した授業内容の提示，2：映像による実際の競技や子どもの運動の提示，3：動画や写真による各種目のポイントの解説，4：失敗事例の提示，5：タブレットやスマートフォンを利用した学生同士での動作撮影と評価，6：授業内容に関するオンデマンド動画の配信，7：Google Forms を活用した授業の振り返りなど)，②基本的な運動内容から発展的な運動内容へとステップアップしていく授業進行，③学生の運動に対する個人への積極的な声掛けや賞賛，④複数での指導体制（教員および TA の大学院生)，⑤学生の活動をお互いに認め合う雰囲気などが挙げられる．学生が各授業後に提出するレポート資料では，「実際の競技の映像を見ることで陸上に対する興味が高まった」,「初めて走ることやハードルを越えるためのポイントが理解できた」,「基本からスタートすることで，運動が苦手な私でも順番に理解することができた」,「映像を見ることで自分の課題が明確になった」,「苦手な陸上の活動で初めてほめられた，次もやろうと思った」,「記録が伸びて嬉しかった」などの記述があり，肯定的な意識へと変化していく様子が見られている．体育授業における積極的な学習参加や，継続的な運動行動の形成には，高い運動有能感が重要であり，高い運動有能感を形成することで学習での回避的態度を抑制することができると指摘されている（當山ら，2023）ように，上述したような授業の特徴が学生の運動有能感に影響を与え,好意性の変化が起きたと推測されるが,より詳細な検討が今後の課題である.

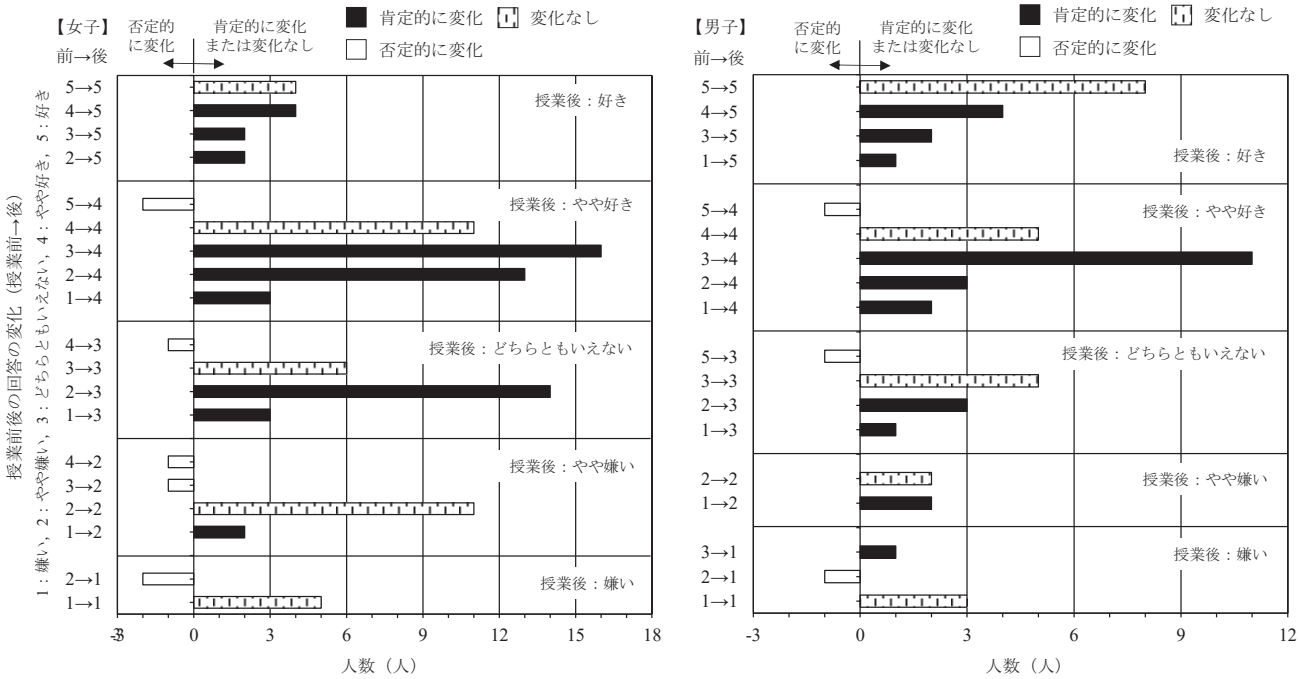

図5　授業前後における男子（右）および女子学生（左）のハードル走に対する好意性の変化

Ⅳ．まとめ

本研究の目的は，小学校教員免許状取得のために必修である「小学校教科内容論体育」の受講生を対象に，教員を志望する本学学生の体育および陸上運動の授業に対する好意性と，受講前後の好意性の変化を明らかにする

ことであった．本研究の結果および考察をまとめると以下のようになる．

・体育授業に対する好意性として，小学校体育授業および体育授業全体を「好き」という意識を持つ学生の割合は，それぞれ 62.3%と 66.1%，「嫌い」という意識を持つ学生の割合は 21.4%と 15.8%であり，2022 年度の受講生の割合とほぼ同程度であった．また，体育に対する好意性には男女差があり，男子の方が好意性は高く，女子の方が好意性は低かった．

・陸上運動の授業に対する好意性として，「好き」という意識を持つ学生の割合は短距離走で 48.1%，ハードル走で 31.3%，リレーで 52.4%，走り幅跳びで 36.1%，走り高跳びで 27.0%，「嫌い」という意識を持つ学生の割合は短距離走で 35.6%，ハードル走で 44.2%，リレーで 32.2%，走り幅跳びで 38.2%，走り高跳びで 42.9%であった．また，リレー以外の全ての種目において好意性に男女差が見られた．

・授業前後における陸上運動の授業に対する好意性の変化として，全ての種目で「好き」という意識を持つ学生の割合が増加し，「嫌い」という意識を持つ学生の割合が減少した．

本授業は本学の体育領域を除いた学生の約 89%が受講していることから，本授業の結果の傾向は，言い換えると本学学生全体（体育領域以外）の入学時点での体育授業に対する意識を反映していると考えられる．つまり，小山ら（2023）を含めた 2 年間の結果を踏まえると，入学時点での本学学生（体育領域以外）は，他大学の教員養成課程の学生と比較して体育に対して「嫌い」という意識を持つ学生の割合がやや多いこと，陸上運動の授業に対する意識では半数に近い学生が「嫌い」という意識を持つ種目があると言えるであろう．一方で，小学校教科内容論体育の授業を通して，学生の陸上運動に対する好意性を大きく変容させて，学生の意識を好意的なものにできる可能性があることも明らかとなった．

今後の課題として，本研究では学生の好意性が変化した要因を授業の特徴と関連づけて示したが，これらの考察は推察に過ぎないため，より有効な授業を展開するために，実際の授業内容と学生の好意性や運動有能感の変容と関連づけて検討することが必要である．また，本授業の到達目標の 1 つに各種目の指導法の習得もあげていることから（小山と辻，2023），受講による指導に対する自信の変容や獲得状況について評価していくことも今後の課題である．

Ⅴ．参考文献

阿久津千尋，山本篤，浦田達也，中村力，伊藤章（2012）痛くない，怖くない！塩ビパイプで作るミニハードル．体育科教育，60（6），44-45.

福地豊樹，中雄勇人（2018）教員養成大学学生の「体育」認識について考える ―小学校教科専門の授業を通して―．群馬大学教育実践研究　35，125～135.

福冨恵介，春日 晃章，篠田 知之（2011）大学生の運動・スポーツおよび保健体育の授業に対する好き嫌いに影響を及ぼす時期．教育医学，57（2），205-212.

廣兼志保，平井章（2007）教育学部生による小・中学校体育に対する認識傾向～ 過去 10 年間の調査の比較と体育授業に関する理解・考察の分析から～．教育臨床総合研究，6，77～93.

川田裕樹（2018）「初等科教育法（体育）」受講者における運動への苦手意識と好意性および体育指導への不安 ―男女の差に着目して―．國學院大學人間開発学研究，9，23-37.

木原成一郎，磯崎尚子，磯崎哲夫（2003）教育実習生の小学校体育科指導の心配に関する事例研究．日本教科教育学会誌　25，29-38.

小山宏之，辻哲夫（2023）京都教育大学　2023 シラバス　小学校教科内容論体育．https://kyoumu.kyokyo-u.ac.jp/2023/syllabus/13001091_aa_Ja.html（2023 年 8 月 31 日閲覧）

小山 宏之，和藤 哲史，西川 啓子（2023）「小学校教科内容論体育」受講者の体育および器械運動に対する意識に関する研究．教育実践研究紀要，5，177-184,

京都教育大学（2023）履修案内 2023 年度（2023 年度入学者用）．京都教育大学　教務課.

松田恵示（2016）「遊び」から考える体育の学習指導. 創文企画.

中西匠（2000）小学生のための「速く走るための動きづくり」．体育科教育，48（13），54-57.

三浦裕，小林禎三，片岡繁雄（2001）教科専門科目「小学体育」に対する受講学生の意識・態度について．北海道教育大学紀要，教育科学編，52（1），197-208.

宮平喬（2017）「小学校体育実技の示範能力に関する調査−器械運動に関する技能の自己評価−」．筑紫女学園大学教育実践研究，3，153-160.

文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社.

大塚光雄（2013）態度測定にみる短距離走の授業：学校段階，性別，好感度の違いが授業評価に与える影響．体育科教育学研究，29（1），49-62.

白旗和也，大友智，西田順一，原祐一（2021）小学校体育科における教師効力感を高めるコンサルテーション方略の開発及び有効性の検討：体育指導効力感尺度の開発を通して．体育学研究　66，869-890.

當山貴弘，中須賀巧，杉山佳生（2022）体育授業における運動有能感と回避的態度との因果関係の推定．体育学研究，67，897-914.